

## 意思決定スタイルに関する日本語版決定困難懸念尺度 の作成と信頼性・妥当性の検討<sup>注1 注2</sup>

立教大学 菊地 学  
立教大学現代心理学部 都築 誉史  
立教大学大学院現代心理学研究科 千葉 元気

### The construction, reliability and validity of a Japanese Personal Fear of Invalidity Scale for measuring decision-making style

Manabu Kikuchi (Rikkyo University),  
Takashi Tsuzuki (College of Contemporary Psychology, Rikkyo University), and  
Itsuki Chiba (Graduate School of Contemporary Psychology, Rikkyo University)

The first purpose of this study is to develop a Japanese version of the Personal Fear of Invalidity scale for measuring people's decision-making styles. The second purpose is to examine the relationship between our scale and the existing Japanese Regret Scale and Japanese Maximization Scales. The Personal Fear of Invalidity Scale was translated into Japanese and used to conduct a survey of 302 Japanese undergraduate students. The results of factor analyses and reliability analyses indicate that our new Japanese scale has a high Cronbach's alpha factor and correlation coefficient by using the test-retest method. Further, the validity of the scale was verified by measuring correlation coefficients with the existing scales. The analyses showed significant correlation coefficients among the Personal Fear of Invalidity Scale, the Regret Scale, and the Maximization Scale. These results demonstrate that our new Japanese scale has good reliability and construct validity.

**Key words:** scale development, decision making style, personal fear

日々の生活の中で私たちは、複数の商品の中から一つを選んだり、やるべき仕事に優先順位をつけるといった意思決定を行っている。従来、人間は必要性や緊急性から自分の欲しい物を合理的に選び、やらなければならない行動を一貫して選んでいると仮定され、意思決定研究は一般化された規範理論や記述理論を前提として議論されることが多かった。しかし、こうした選択は、情報の不

確実性や個人差をふくむ多様な要因によって、強く影響を受ける事が、近年多くの研究によって明らかになってきた。日常における実際の意思決定は、認知能力の個人差、時間や環境などの制約、情報の曖昧さや不確実性などによって大きく変化する。情報の曖昧さや不確実性の影響には個人差があり、意思決定スタイルを調べることは重要であると考えられる。本研究では、人間の意思決定

<sup>1</sup> 本研究は、日本心理学会第73回大会（2009年）での発表を再分析および加筆修正したものに、信頼性と妥当性を高めるための調査を追加したものである。

<sup>2</sup> 本論文で使用した尺度の翻訳や、調査実施にご協力いただいた富田望仁香さんに感謝致します。また、調査の実施にあたり、帝京大学文学部心理学科の春日喬教授、学習院大学文学部心理学科の伊藤忠弘准教授にはひとかたならぬお世話になりました。ありがとうございました。そして、調査に回答してくださった、立教大学、専修大学、帝京大学の学生の皆様には、感謝の念にたえません。本当にありがとうございました。

や思考における、反応スタイルの差異や個人差に焦点を当てる。

意思決定研究では、意思決定者を取り巻く環境について、その意思決定者がどれだけ知っているかという環境に関する知識の性質から、確実性下、不確実性下、リスク下と区別される(竹村, 1996)。不確実性下での意思決定とは、客観的確率ではなく主観的確率のみに頼らざるを得ない場合である。一方、リスク下の意思決定とは、客観的確率が外的に与えられている場合を指す(竹村, 1996)。本研究は、不確実性下での意思決定における個人差の問題をさらに詳細に検討するため、“意思決定スタイル (decision-making style)”を測定する日本語版尺度の作成を目的とした。

個人の反応傾向や差違に注目した意思決定スタイルに関する研究は、近年、数多く報告されている(Buhr & Dugas, 2002; 磯部・久富・松井・宇井・高橋・大庭・竹村, 2008; 楠見, 1992; Parker, Bruine de Bruin, & Fischhoff, 2007; Thompson, Naccarato, Parker, & Moskowitz, 2001; 都築, 2008)。磯部他(2008)は、Schwartz, Ward, Montecarlo, Lyubomirsky, White, & Lehman (2002)による“後悔-追求 (Regret and Maximization) 尺度”の日本語版を作成した。磯部他(2008)は、はじめに Schwartz et al. (2002)の尺度を翻訳して調査を行ったが、因子構造が異なることや、内容が日本の生活様式に合致しにくいことが明らかになった。そこで、日本人の生活様式に合わせて幅広い状況下での意思決定を測定する項目を作成し、再度調査を行った。その結果、Schwartz et al. (2002)と同様に“後悔”と“追求”の2因子を抽出している。

都築(2008)も Schwartz et al. (2002)の尺度を翻訳して調査を行っている。磯部他(2008)と類似した研究であるが、初回の調査を行った時点では、まったく互いに情報のやり取りはなく、別個に行われたものであり、和訳された項目の表現も異なる。また、都築(2008)は自尊感情 (self-esteem) に着目し、後悔-追求尺度と“自己肯定意識尺度 (平石, 1993)”との関係を検討してい

る。

リスク認知に関する研究としては、楠見(1992)の“リスク回避志向性尺度”がある。この尺度は日常生活に関するリスク回避に焦点を当てており、“生命に関するリスク回避”、“一般的な不安”、“金銭に関するリスク志向”の3因子からなる。

不確実な状況や曖昧な状況における個人差を測るという観点からすると、問題に対して確固たる答えを求め、曖昧さを嫌う“認知的完結欲求 (cognitive need for closure)”を扱った鈴木・桜井(2003)の“認知的完結欲求尺度”を挙げることができる。また、日常生活での様々な課題を先延ばしにしてしまう傾向を扱った、杉浦・杉浦・丹野(2007)の“不決断傾向尺度 (frost indecisiveness scale)”は、強迫症状との間に正の相関があり、ミスを恐れる傾向との関連も示されている。今回取り上げる Thompson et al. (2001)の“決定困難懸念尺度 (personal fear of invalidity scale)”は、日々の生活の中で決断することの困難さや、その後、自分が決定した内容を再検討する傾向を扱う尺度で、1因子からなる。また、自己意識 (self-consciousness) や抑うつ (BDI: Beck depression inventory) などの尺度と中程度の相関が確認されている。

本研究では、意思決定場面において、意思決定者に与えられる情報が不確実であったり、再検討を要する状況を個々の人がどのように捉えるかという意思決定スタイルを測定する日本版尺度を作成することを第1の目的とした。まず、Thompson et al. (2001)の決定困難懸念尺度の日本語版を作成し、この尺度の信頼性と妥当性を検討する。なお、Thompson et al. (2001)は“決定困難懸念尺度 (personal fear of invalidity scale)”と“認知的構造欲求尺度 (personal need for structure scale)”の2尺度を研究しているが、本研究は不安に焦点をあてているため、決定困難懸念尺度のみ取り上げた。

妥当性の検討に関して、先行研究をふまえ認知療法の測定手段として開発された Beck Depre-

ssion Inventory を翻訳した，“日本語版ベック抑うつ尺度（林，1988；林・竹本，1991；21項目）”を使用することとした。さらに本研究では，“楽観的自己感情”と“悲観的自己感情”の2因子からなる中村（2000）の“楽観主義尺度”を使用した。この楽観主義尺度は“結果がどうなるかはつきりしない時は，いつも一番よい面を考える”，“いつもものごとの明るい面を考える”，“自分の将来に対しては非常に楽観的である”などの12項目からなり，楽観主義項目4項目と悲観主義尺度4項目とフィラー項目4項目からなる。不確実な状況を忌避する傾向と，これから起こることを楽観的に考える傾向とは相反するか無関係であり，悲観的に考える傾向とは類似した関係にあると予測できる。

意思決定には，(a) 意思決定の前段階，(b) 意思決定の処理段階，(c) 決定結果の評価段階という一連の継時的なプロセスがある。本研究の第2の目的として，主に意思決定前に重点を置く本研究の尺度と，意思決定結果の評価や付随する感情を重視する既存の後悔-追求尺度（磯部他，2008）との関連を調べることにした。

## 方 法

### 調査参加者と手続き

立教大学・専修大学・帝京大学の学生，男女計302名（有効回答者数293名，男性126名，女性160名，不明7名）が調査に参加した。年齢の平均（SD）は，20.22歳（2.98歳），調査期間は2008年12月-2009年1月であった。調査は講義中に集団実施した。作成した2尺度の6ヶ月後の再検査信頼性を確認するため，2009年7月に立教大学の学生79名（2度目の調査協力者は79名であったが，一度目の調査時に再調査確認ID欄が無記名であるものが多く存在し，一致者が44名であり，さらに有効回答者は40名であった）に対して再調査を行った（2度目の調査も，講義中に集団実施した）。その後，尺度の妥当性を検討するため，2010年6月に立教大学の学生，男女計132名（有効回答者数121名，男性33名，女性86名，不明2名）を対

象に調査を実施した。

### 質問項目

Thompson et al. (2001) の決定困難懸念尺度を日本語に翻訳して使用した。翻訳は忠実にを行い，特に意識などは行わずバックトランスレーションは行っていない。翻訳した尺度は，決定困難懸念尺度14項目から構成されている。また，上記尺度と磯部他（2008）の後悔-追求尺度との関連を調べるため後悔尺度8項目，追求尺度8項目，計16項目を使用した。各質問項目に対する回答には，全て7件法を用いた（“全くあてはまらない：1” - “非常にあてはまる：7”）。作成した尺度に関する妥当性の検討には，中村（2000）の楽観主義尺度とベック抑うつ尺度（林，1988；林・竹本，1991）を使用した。先行研究の形式をふまえ，回答には，それぞれ4件法と5件法を用いた。

## 結 果

決定困難懸念尺度14項目に関して，因子分析を行った（主因子法，プロマックス回転）。固有値の変化は4.05，1.41，1.31，1.04であった。スクリープロットと解釈可能性に基づいて，2因子構造が妥当であると見なした。2因子の両方に十分な因子負荷量を示さなかった3項目を，以降の分析から除外した。なお，回転前の2因子による11項目の分散説明率は，46.24%であった。

第1因子は9項目から構成されており，“最近行った決定を再検討し続ける傾向がある”や“重要な決定をした後でも，自分が間違っていないか確かめるため，賛否両論を考え続ける”など，決定に対して不安や懸念を抱く内容の項目が高い負荷量を示した。そこで“決定困難懸念”因子と命名した。第2因子は2項目からなり“他者が肯定的または否定的に捉えていようと，自分の態度を表明することをいとわない”と“重要な意思決定を，決して先延ばしにしない”といった態度を示す項目（逆転項目）で構成されたことから，“決定忌避”因子と命名した。しかし，第2因子に対して因子負荷が高かったのは2項目のみであり，再現性が低いため，それ以降の分析からは排除し

Table 1

日本語版決定困難懸念尺度の因子分析結果（主因子法，プロマックス回転， $n = 293$ ）

項目	F1	F2
<b>因子1：決定困難懸念</b>		
重要な決定をした後でも、自分が間違っていないか確かめるため、賛否両論を考え続ける。	-.71	-.10
まれに、少数の意思決定に四苦八苦することもある。	.70	-.12
ほとんどの決定に苦労しがちである。	.61	.27
最近行った決定を再検討し続ける傾向がある。	.60	.01
とてもややこしい状況に対して、あまりにも多くの選択肢を想定してしまうことがある。	.56	-.20
新しい見解に賛成することに躊躇もするし、実証済みの見解にしたがうのも安心できない。	.53	-.11
自分が間違っている可能性があるので、何かを約束する気になれない。	.51	-.02
間違うことを心配しすぎなければ良いのと思う。	.46	.05
時々、自分の優柔不断さに我慢できなくなる。	.43	.37
<b>因子2：決定回避</b>		
他者が肯定的または否定的に捉えていようと、自分の態度を表明することをいとわない。 <sup>a)</sup>	-.25	.50
重要な意思決定を、決して先延ばしにしない。 <sup>a)</sup>	-.03	.50
	因子間相関	.47

<sup>a)</sup> は逆転項目を示す。

Table 2

日本語版後悔 - 追求尺度の因子分析結果（主因子法，プロマックス回転， $n = 293$ ）

項目	F1	F2
<b>因子1：後悔</b>		
何かを購入した後に、違うものにしていればよかったという事がよくある。	.87	-.13
選ぶのに苦労した商品でも、買った後に後悔することが多い。	.83	-.15
人生において、“あの時こうしておけば良かった”と強く思うことがある。	.72	.07
ある商品を購入した際、より良い商品があった可能性を考えて後悔することがある。	.69	.08
過ぎてしまった事に対して、“こうすれば良かった”などと考えることがよくある。	.68	.04
購入した商品が良かったとしても、“もっと良いものがあつただろうに”と思ってしまうことが多い。	.68	-.03
くよくよ過去の事を悔やむ方だ。	.63	.08
自分は優柔不断だと思う。	.47	.15
<b>因子2：追求</b>		
一つのものを買うにも、他店と比べてみるが多い。	.04	.69
何かの決断をする時は、ありとあらゆる選択肢を考えてみる。	-.02	.67
商品を選ぶときは、つねに最良のものを選ぶようにしている。	-.05	.59
可能性がある限り、物事を追求する事に労力は惜しまない。	-.03	.42
買い物の時間や、商品を選ぶ時間が他人より長いと思う。	.21	.41
	因子間相関	.37

た (Table 1)。

次に信頼性に関しては、決定困難懸念尺度（9項目）の $\alpha$ 係数は.81であり、再検査法による相関係数も.75 ( $p < .01$ )と良好な結果が得られた。妥当性に関しては、決定困難懸念とベック抑うつ尺度の相関は.39 ( $p < .01$ )であり、Thompson et al. (2001)による先行研究で得られた値よりもやや低い有意な正の相関があった。また、決定困難懸念と楽観主義尺度に関しては、楽観的自己感情との相関が-.11 ( $n.s.$ )、悲観的自己感情との相関が.29 ( $p < .01$ )であった。

日本語版後悔-追求尺度に関しては因子分析（主因子法，プロマックス回転）の結果、固有値の変化は、5.19, 2.08, 1.34, 1.07, 1.05であった。スクリープロットと解釈可能性に基づいて、磯部他 (2008)の研究と同様に2因子構造が妥当であると見なした。2因子の両方に十分な因子負荷量を示さなかった3項目を、以降の分析から除外した。なお、回転前の2因子による13項目の分散説明率は、52.73%であった。“後悔（8項目）”と“追求（5項目）”の2因子が抽出され、因子間相関係数は、.37であった。

**Table 3**  
下位尺度の性差に関する検討

尺度名		男性		女性		<i>t</i>
		平均値	(SD)	平均値	(SD)	
決定困難懸念尺度	決定困難懸念	4.32	0.96	4.11	0.86	1.94 <sup>†</sup>
後悔-追求尺度	後悔	4.79	1.13	4.40	1.10	2.89**
	追求	4.97	0.95	4.88	1.01	0.79

\*\**p* < .01, <sup>†</sup>*p* < .1

**Table 4**  
下位尺度の平均値 (SD), 項目数,  $\alpha$  係数, 再検査信頼性 (*r*), 下位尺度間の相関係数

下位尺度	平均値	SD	項目数	信頼性		下位尺度間相関	
				$\alpha$ 係数 ( <i>n</i> = 293)	再検査値 ( <i>r</i> , <i>n</i> = 40)	決定困難懸念	後悔
決定困難懸念尺度	決定困難懸念	4.21	0.91	9	.81	.75**	
後悔-追求尺度	後悔	4.58	1.12	8	.88	.85**	.68**
	追求	4.92	0.98	5	.69	.75**	.36**

\*\**p* < .01

後悔尺度は、“何かを購入した後に、違うものにしていればよかったという事がよくある”, “選ぶのに苦労した商品でも、買った後に後悔することが多い”, “くよくよ過去の事を悔やむ方だ” などであり, 追求尺度は “一つのもをを買うにも, 他店と比べてみることが多い”, “何かの決断をする時は, ありとあらゆる選択肢を考えてみる”, “可能性がある限り, 物事を追求する事に苦労は惜しまない” といった項目から作成されている (Table 2)。後悔尺度と追求尺度の  $\alpha$  係数は, 順に .88, .69 であり, 再検査法による相関係数は, 順に .85, .75 (ともに, *p* < .01) であり, 概ね満足できる信頼性を有していると評価できる。

尺度の合成得点は, 各尺度得点の合計を項目数で割った平均得点とした。下位尺度の平均 (SD) は, 決定困難懸念尺度が 4.21 (0.91), 後悔尺度が 4.58 (1.12), 追求尺度が 4.92 (0.98) であった。性差の検討を行うため, 決定困難懸念尺度, 後悔-追求尺度の下位尺度における平均値について *t* 検定を行った (Table 3)。その結果, 決定困難懸念

(*t* (284) = 1.94) で有意傾向差が見られた (*p* < .1)。

因子分析に基づいて作成した 3 種類の下位尺度の平均値 (SD), 下位尺度の  $\alpha$  係数, 再検査による相関係数 *r* の値, そして, 本研究で得られた 3 種類の下位尺度間の相関係数を Table 4 にまとめ示す。(a) 決定困難懸念尺度-後悔尺度間に中程度の有意な正の相関 (*r* = .68, *p* < .01) がみられ, (b) 決定困難懸念尺度-追求尺度間には, 有意な弱い正の相関 (*r* = .36, *p* < .01) が示され (c) 後悔尺度-追求尺度間にも有意な弱い正の相関 (*r* = .35, *p* < .01) がみられた。また, 決定困難懸念尺度-後悔尺度間と決定困難懸念尺度-追求尺度間の相関係数の差の検定を行ったところ前者のほうが大きいことが示された (*t* (290) = 6.37, *p* < .01)。

さらに, 性差と尺度間相関についても検討を行った。その結果, 男性 (*n* = 126) については (a) 決定困難懸念尺度-後悔尺度間に有意な強い正の相関 (*r* = .71, *p* < .01) がみられ, (b) 決定困難懸念尺度-追求尺度間には, 有意な弱い正の相関

Table 5  
男女別下位尺度間相関

	下位尺度	決定困難懸念	後悔	追求
決定困難懸念尺度	決定困難懸念		.71**	.30**
後悔－追求者尺度	後悔	.64**		.30**
	追求	.41**	.39**	

注) 右上段は男性 ( $n=126$ ) を, 左下段は女性 ( $n=160$ ) の相関係数を示す。

\*\* $p < .01$

( $r = .30, p < .01$ ) が示され (c) 後悔尺度－追求尺度間にも有意な弱い正の相関 ( $r = .30, p < .01$ ) がみられた。女性 ( $n = 160$ ) については (a) 決定困難懸念尺度－後悔尺度間に中程度の有意な正の相関 ( $r = .64, p < .01$ ) がみられ, (b) 決定困難懸念尺度－追求尺度間には, 中程度の有意な正の相関 ( $r = .41, p < .01$ ) が示され (c) 後悔尺度－追求尺度間には有意な弱い正の相関 ( $r = .39, p < .01$ ) がみられた (Table 5)。

また, 尺度ごとに, 相関係数の性差についても検討した。その結果, 決定困難懸念尺度－後悔尺度間 ( $\chi^2 = 1.15, df = 1, n.s.$ ), 決定困難懸念尺度－追求尺度間 ( $\chi^2 = 1.14, df = 1, n.s.$ ), 後悔尺度－追求尺度間 ( $\chi^2 = 0.71, df = 1, n.s.$ ), 各々で有意な差はみられず, これら3種類の相関係数に性差はないことが明らかとなった。

## 考 察

本研究では, Thompson et al. (2001) の決定困難懸念尺度の日本語版を作成し, 日本人大学生に集団実施した。因子分析の結果, 日本語版決定困難懸念尺度に関しては, 主要な1因子が抽出された。また, 今回作成した尺度は,  $\alpha$ 係数と再検査法による検討の結果, ほぼ満足できる水準の信頼性を確認できた。再検査法においては, 検査間隔が比較的長かった (6－7ヶ月) ため, 相関係数が低くなったと考えられる。この点を踏まえ, 今後は1ヶ月程度の間隔をあげた再検査信頼性の確認も必要である。

妥当性に関しては, (a) 決定困難懸念尺度とベッ

ク抑うつ尺度との相関は, 先行研究で得られた値よりは低いものの, 有意な正の相関がみられた点や, (b) 悲観的自己感情と有意な正の相関がみられた点で一定の妥当性があると評価できる。今回作成した日本語版尺度の妥当性をさらに検討するため, 今後, 他の尺度との関係を調べることが重要である。

本研究で作成した尺度と, 意思決定の評価段階を重視する後悔－追求尺度との関連を検討した。その結果, 決定困難懸念尺度と既存の後悔－追求尺度との相関については, (a) 決定困難懸念尺度－後悔尺度間に中程度の正の相関があり, また, (b) 決定困難懸念尺度－追求尺度間にも弱い正の相関が見られた。これら2つの相関係数に対し相関係数の差の検定を行ったところ有意差があり, 決定困難懸念尺度－後悔尺度間の相関係数が, 決定困難懸念尺度－追求尺度間の相関係数より有意に値が大きいことが明らかとなった。つまり, “決定困難懸念”は追求傾向よりも後悔感情と強く関係していることが示された。

本研究で作成した尺度の妥当性をさらに検討するため, 既存の複数の尺度との関連を検討する必要がある。また, 信頼性を再度検討するため, 本研究では6ヶ月程度あけた再検査期間を短期間 (2週間から1ヶ月) に設定して再検査を行う必要がある。さらに, 今回作成した日本語版決定困難懸念尺度と, 意思決定実験場面における選択行動パターンとの関係の検討を進めることが今後の重要な課題である。

## 引用文献

- Drews, A., & Hazlett-Stevens, H. (2008). Relationships between irritable bowel syndrome, generalized anxiety disorder, and worry-related constructs. *International Journal of Clinical and Health Psychology*, **8**, 429-436.
- 林潔 (1988). 学生の抑うつ傾向の検討 カウンセリング研究, **20**, 162-169.
- (Hayashi, K. (1988). An Examination of Student s' Depressive Tendencies. *The Japanese journal of counseling science*, **20**, 162-169)
- 林潔・瀧本孝雄 (1991). Beck Depression Inventory (1978年版) の検討と Depression と Self-efficacy との関連についての一考察 白梅学園短期大学紀要, **27**, 43-52.
- (Hayashi, K., & Takimoto, T. (1991). An Examination of Beck Depression Inventory (1978) and an Analysis of Relation between Depressive Tendencies and Grade of Self-efficacy. *Memoirs of Shiraume Gakuen College*, **27**, 43-52)
- 平石賢二 (1993). 青年期における自己意識の発達に関する研究 (II) ——重要な他者からの評価との関連—— 名古屋大学教育学部紀要, **40**, 99-125
- (Hiraishi, K. (1993). A Study on the Development of Self-Consciousness in Adolescence (II) : The relation between self-consciousness and perceived self by significant others. *Bulletin of the School of Education, Nagoya University (Educational Psychology)*, **40**, 99-125)
- 磯部綾美・久富哲兵・松井豊・宇井美代子・高橋尚也・大庭剛司・竹村和久 (2008). 意思決定における“日本版後悔・追求者尺度”作成の試み 心理学研究, **79**, 453-458.
- (Isobe, A., Hisatomi, T., Matsui, Y., Ui, M., Takahashi, N., Oba, K., & Takemura, K. (2008). Construction of a Japanese version of the “Regret and Maximization Scale” in decision making. *The Japanese Journal of Psychology*, **79**, 453-458)
- 楠見孝 (1992). 意思決定に及ぼす基準比率情報と個人のリスク志向の効果：医療現場における患者としての意思決定 日本心理学会第56回大会発表論文集, **549**. (Kusumi, T)
- 中村陽吉 (編) (2000). 対面場面における心理的個人差——測定の対象についての分類を中心にして—— ブレーン出版.
- (Nakamura, H. (Ed.) (2000). Individual Differences of Psychological Characteristics in the Face-to-Face Setting. BRAIN SHUPPAN.)
- Parker, A.M., Bruine de Bruin, W., & Fischhoff, B. (2007). Maximizers versus satisficers: Decision-making styles, competence, and outcomes. *Judgment and Decision Making*, **2**, 342-350.
- Schwartz, B., Ward, A.H., Monterosso, J., Lyubomirsky, S., White, K., & Lehman, D. (2002). Maximizing versus satisficing: Happiness is a matter of choice. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 1178-1197.
- 杉浦義典・杉浦知子・丹野義彦 (2007). 日本語版不決断傾向尺度の信頼性と妥当性の検討 信州大学人文科学論集人間情報学科編, **41**, 79-89.
- (Sugiura, Y., Sugiura, T., Tanno, Y. (2007). Reliability and validity of the Japanese version of the Frost Indecisiveness Scale. *Studies in Humanities (Human Sciences) Faculty of arts, Shinshu University*, **41**, 79-89.)
- 鈴木公基・桜井茂男 (2003). 認知的完結欲求尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **74**, 270-257.
- (Suzuki, K., & Sakurai, S. (2003). The construction, reliability and validity of a Japanese Need for Closure Scale. *Tsukuba psychological research*, **21**, 135-140.)
- 竹村和久 (1996). 意思決定とその支援 市川伸一 (編) 認知心理学 4 思考 東京大学出版会 pp.81-105.

(Takemura, K.)

Thompson, M.M., Naccarato, M.E., Parker, K.C.H. & Moskowitz, G.B. (2001). The personal need for structure and personal fear of invalidity scales: Historical perspectives, current applications and future directions. In G.B. Moskowitz (Ed.), *Cognitive social psychology: On the tenure and future of social cognition*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. pp.19-39.

都築 誉史 (2008). 追求 - 後悔尺度による意思決定スタイルの測定——尺度の信頼性と自己肯

定意識尺度との関係に関する検討—— 応用社会学研究 (立教大学社会学部紀要), **50**, 93-104.

(Tsuzuki, T. (2008). Measurement of the Decision-Making Style Using the Maximization and Regret Scale : Validity of the Maximization and Regret Scale and the Relationship between Maximization and Self-Consciousness Scales. *The journal of applied sociology*. **50**, 93-104.)

—— 2011. 9. 29 受稿, 2011. 12. 5 受理 ——